

## 七沢希望の丘初等学校

正会員 中 村 勉 君

都市郊外の私鉄駅から自動車ですら数分、民家もまばらになりかけた辺りに、この小学校の敷地である小さな丘が現れる。木立に囲まれたアプローチから建物自体は見え、ややきつい勾配の丘を登り、急角度に切り返した所で初めてその姿を現す。敷地周辺には畑が広がり、遠方から眺めると、建物はあたかも防風林に囲まれた小集落を思わせる。

共同性・連帯性を育む「大きなひとつの家」としての小学校を実現するために、ここでは木造大架構による吹き抜け空間が提案されている。建物を覆う大屋根は、アプローチ側の低い空間から中央部の 2 層分の空間を包み込み、さらに丘の勾配に面する吹き抜け教室まで、高く低く、また平面的にうねりながら連続してゆく。内部空間における各所のスケールを調整しつつ、丘の上に立つ建築としてのシルエットを周辺環境に溶けこませるように、大屋根は巧みに分節されている。また、この屋根は、構造的には地場産材の丸太を主材とした天枰梁架構によるものである。様々な形状、メンバーの線材による屋根架構は、平面各所に配された耐力壁と相まって、内部空間に豊かな陰影を与えている。このことに加え、木質材料を多用し、建具もほぼ木製で統一するなど、架構のつくり方と仕上げ材料の整合性は十分に検討されている。このことが、木質系建築特有の心地よい雰囲気をもたらし、内部空間全体にもたらしている。

さらに、里山の自然と共生し、自然から学び、それを芸術性にまで高めるという教育方針のもと、ここでは里山自体をひとつの環境世界と捉え、地場産材の利用はもとより、雨水・汚水の浸透、地中熱の利用、また熱源としてのチップ材の利用など、総合的な環境建築の実現が図られている。

このように、架構、材料の選択、周辺環境と外観の関係といった点における高い完成度を示しつつ、実験的な教育プログラムのせいであろうか、内部空間における教室の分節や、そのための設えなどには、未確定な部分が含まれるように見受けられた。あるいは、教育方針や教員と生徒との関係など、絶えず微調整を続けることが求められる現代の教育現場においては、こうした変化のための冗長性は、学校建築に必要な性質と理解すべきかもしれない。一方、教える／教えられる人間関係の小さなユニット——それは時に先生 1 人、生徒 2 人程度からなる場合すらある——が、大きな架構の下でぽつり、ぽつりと散在する様子は、われわれが通常抱く学校建築のイメージからはおよそかけ離れたものである。しかし、大きな開口部からこぼれる豊かな緑を背景に、慎ましく学び合う彼らの姿は、教育の場としての原点を考えさせてやまない。ここからどのような人物が輩出するのか、成長した彼ら、彼女らが、幼年期の数年間を過ごした空間を、将来どのように振り返るのか、この実験的な学校建築の変化を辿るとともに、いずれ聞いてみたい気がした。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。